

[書評]

ポール・ラトー 『ライプニッツの最善世界説』

酒井潔・長綱啓典監訳、知泉書館、2025年

下 田 和 宣

はじめに 本書の特色と意義

本書は Paul Rateau, *Leibniz et le meilleur des mondes possibles*, Paris, Classiques Garnier 2015 の邦訳である。著者のポール・ラトー（1974-）氏は現代の国際的なライプニッツ研究を牽引する研究者のひとりであり、本書は『ライプニッツの悪の問題——弁神論の諸基礎と改良』（2008年）に続くそのライプニッツ『弁神論』研究書の第二弾である。原著は400頁を超える大著であり、監訳者2名と9名の翻訳者からなるチームによって10年近くかけて入念に仕上げられた貴重な訳業である。本書は「最善世界」という理念を中心として浩瀚で難解な『弁神論』を体系的に読解するという専門的な研究書である。それでいて練りこまれた訳文や適宜加えられている補足のおかげで、ライプニッツプロパーではない読者でも内容に踏み込んだ議論の筋をしっかりと追跡することができるものとなっている。

「訳者解説」によれば、本書は1940年代後半以降のライプニッツ文献学の進展による資料の利用可能状況の改善を受けて、『弁神論』という「この総合的かつ緻密に構成され、論証的かつ証明的に展開されたライプニッツ生涯最大の著作に対し、その理論的な重層性を解き明かすとともに、ライプニッツの哲学全体におけるその重要性を正当に指摘し、その再評価・復権への道筋をしっかりとつけた」（571）とされる。これまで『弁神論』は通俗的な論争の書であると受け取られるのが常であったが、本書による綿密な読解はそうした「従来の一面的で皮相的な解釈史を一挙に刷新するものである」（571）といっても過言ではなく、その意味で本書は「まさに「弁神論研究の近代化」と称されるに相応しい」（574）とされる。

このように画期的な『弁神論』研究であると高く評価される本書であるが、

さらに次のふたつの背景的な問題意識からその特色を際立てることができる。まず、ラトー氏自身が「日本語版への序」で指摘しているように、本書には20世紀以降のライプニッツ研究の主要動向に対する批判的態度がある。「大学での研究は長年の間ライプニッツの著作のうち形而上学や道徳の観点を、なかならず悪および神の正義（弁神論）という問題の扱いを脇へ追いやり、論理学、認識論、言語、自然学、さらに数学といった他の諸テーマの研究を優先してきた」（xiii）。分析的な研究手法の隆盛とも相まって、論理学的自然哲学的関心からのライプニッツ研究はたしかに大きな業績を挙げてきた。そのため他方で『弁神論』が取り扱う問題系とともに、この書自体もまたライプニッツ研究の中心から外される傾向にあった。このことがライプニッツ哲学の体系的な理解への障壁となっていることは言うまでもない。のみならず、研究者の関心から分野を切り分け、現代の問題へと応用可能なものをライプニッツの著作群から選り分けるという態度は、ラトー氏が本書で強調するような『弁神論』の総合的で多層的な性格を見失わせる。ラトー氏によれば、そもそも『弁神論』とは神学や宗教哲学に局限された議論を提供するものではなく、多様な観点を包括したうえで成立している書なのである。研究の偏向を是正し、形而上学や道徳への問題関心を回復させることで、ライプニッツの著作が元来有していたはずの哲学的に豊かな視野を取り戻す——この大きな狙いを達成するためには、悪の实在に対して神の正義を擁護するという、表面的に受け取るだけならきわめて特殊で神学的に響く課題が、世界論や認識論をはじめとしたさまざまな分野の問題といかに密接に関連しているのかということを示す必要がある。そのために『弁神論』を徹底的に読み直し議論の重層的な構図を整理するというのがラトー氏の戦略である。

『弁神論』を一面化してきたのは専門的なライブニッツ研究だけではない。ヴォルテール『カンディード』のオプティミズム（楽天主義）批判以後、歴史上で悲劇や災厄が起こるたびに、「悪の存在にもかかわらず、われわれの世界は最善の可能世界である」（4）というライブニッツの主張が、たいていのところ揶揄の対象として繰り返し非難的になってきた。さしたる罪もない人々の痛みや「なぜわたしが苦しまなければならないのか」という旧約聖書のヨブのような嘆きを目の当たりにすれば、現況を少しでも正当化するような論調に対して心情的な忌避感が生じるのは当然と言えば当然であろう。「アウシュヴィッツ以後」において、あるいは「3・11以後」において、ライブニッツはたびたび説明の責任を求められる。神の正義を擁護するための弁明そのものに対して、皮肉にもそれを正当化するための弁明が要求されるのである。それに対して誠実な応答がいかにも可能かどうかということはたしかにきわめてアクチュアルな倫理的課題であると言えよう。しかし、それがまさにきわめて重要で切迫した問いであるがゆえに、その一点へと集中することでライブニッツ『弁神論』全体の体系的な議論がもつ幅が見えなくなってしまう、あるいは余剰として切り落とされてしまっているのではないか。そこからともすれば、「弁神論」という言葉だけがライブニッツの真意を離れていわばひとり歩きしてきたようにも見える。許容できない悪を前に世界と神の善性を擁護することはなお可能か、という問いは切実なものであろうが、ライブニッツに応答を求めるのだとすれば、少なくとも『弁神論』の最善世界説がもつ多重な奥行きを平板化することなく、ひとつひとつの息の長い議論に付き合う必要もあるだろう。「弁神論」の今日的な意義の要求に対するラトー氏の提案はそのようなものだと思う。たしかに、ラトー氏の研究の主眼はライブニッツを代弁し積極的にこの問題に答えようとするものではな

ポール・ラトー『ライブニッツの最善世界説』酒井潔・長綱啓典監訳、知泉書館、2025年 61
い⁽¹⁾。しかしだとしても、その研究姿勢そのものには問題に対するある種の
態度が含まれているように評者には思われる。この点は本書評の最後で改めて
考えることにしたい。

1. 本書の章立て

本書の章立ては以下の通りである。

- (1) もっとも、ラトー氏は今日の倫理的観点におけるライブニッツ的「弁神論」の意義をまったく考慮していないというわけではない。「日本語版の序」ではそれについて次の三つにまとめられている。

1. 人間が抱く倫理的判断は本質的に有限なものである。だから「それは、まず、最善は悪を排除しないが故に、最善は常に善であるとは限らず、われわれの善を必ず意味するものでもない、ということ」(xiv)を肯定することが肝要である。

2. この点に基づくなら自制と賢慮という倫理的な態度が導き出される。「ライブニッツは、世界のいろいろな出来事とその意味についてわれわれが行なう解釈において自制と賢慮を推奨」している。というのも「われわれには実際のところ、あれこれの個別的な悪がどのようにして神の計画のうちに入っており、諸可能世界のうちの最善のものにそれぞれの仕方で貢献しうるのかはわからない」(xiv)からである。

3. 現状改善のためには実践が必要である。「もし(いかにしても変えられない)過去に満足しなければならないとしても、現在の諸事物の状態に決して満足してはならず、これを改革し、悪を除去し、将来における善を促進するように努力しなければならず、「われわれの世界は、最善世界が最善であるためにわれわれが為さなければならないことを為すことなしに、つまり、われわれが最善を欲しそれに向かうことなしには、諸可能世界の最善であることはできない」(xiv-xv)。

われわれの世界は「自らの知性によって、自らの自由によって、唯一それ〔すなわち最善〕を実現できる存在者たちを含む世界であるという意味において」最善であると言える。だからこそそれが実現するために「さらに必要であるのは、彼ら〔すなわちわれわれ〕がそこにおいて熱意と粘り強さでもって働きかけること」(xv)なのである。

ラトー氏が挙げるこれらの諸点は『弁神論』の周到な読解から導き出されたものであるが、それが今日においてどのような意義をもつのか、20世紀以降の批判に応答可能なものであるか否かについては判断が差し控えられているように思われる。

序章 弁神論——論証しない学知？

第Ⅰ部 諸可能世界の最善とは何か？

第1章 世界をつくるもの——共可能性、完全性、調和

第2章 ライプニッツにおける完全性、調和、そして神による選択

第Ⅱ部 最善なるものは進歩を排除するか？

第3章 永劫回帰に反して——1694-1696年以前における世界の進歩と精神の至福

第4章 世界は進歩するのか？——ライプニッツにおける世界の進展モデル

第Ⅲ部 諸精神の王国

第5章 精神の本性と特殊性

第6章 愛——同一性と表出

第Ⅳ部 可能な最善の世界での行為

第7章 ライプニッツにおける道徳の地位とその諸原理の起源

第8章 無神論者は有徳でありうるか？

終章 フランスにおけるオブティミズムの運命（1710-1765年）

本書は「序章」で「弁神論」に対するライプニッツの動機づけと理論的な基礎を確認したうえで、そこから以下の4つの章で個別の論点について詳細に検討したのち、「終章」において18世紀における『弁神論』受容史を整理する、という構成をもっている。この書評ではおもに「序章」と「第Ⅰ部」の議論を追うことにしたい。

2. 「序章」の議論

「序章 弁神論——論証しない学知？」⁽²⁾の目的は「どのように、そしてなぜライプニッツは悪の問題に取り組むのか」、そして「なぜこの問題はライプニッツにおいては、彼が「弁神論」と呼ぶものを通じて取り扱われるのか」(6)を示すことにある。「弁神論」(théodicée)という(1696年6月8日付エティエンヌ・ショヴァン宛書簡ではじめて)ライプニッツが創案した術語とそれが指示する議論の全体は、「悪の問題を論じるにあたって、独創的な試みと新機軸のアプローチを明示している」(3-4)とラトー氏は判定する。

「弁神論」はこの世の悪の存在に対して神の善意や全能を擁護するものであるが、このテーマ自体は歴史的に見て新しいものではない。それに加えてのちにカントの批判哲学が、人間的な認識能力の限界を超え出ているがゆえに「その不当性と失敗を指弾することになる、かの合理神学の最後の果実のひとつ」(4)にすぎないとすれば、ライプニッツ的「弁神論」に独自の意義と有効性をどこに認めればよいか。「序章」では以下の5節に分けてこの問題が整理される。

「a. 弁神論の諸基礎と諸要件」では、ライプニッツがなぜ世界の悪と神の擁護という課題に取り組んだのか、その動機が論じられる。とりわけ強調されるように、この問題を取り上げることには外的で偶然的な事情による以上に、ライプニッツ哲学の体系に対する内的な必要性が、言い換えれば「体系的な一貫性によって導かれる思惟そのものの要請」(8)があった。すでに神への懐疑が一般的となった当時において、神学的な論証だけで悪と神の正義の間

(2) 初出はLarry M. Jorgensen/Samuel Newlands (ed.), *New Essays on Leibniz's Theodicy*, Oxford Univ. Press, 2014. 所収の論文「ライプニッツの弁神論の理論的諸基礎」。

題を論じることにはもはやできない。したがってあくまで哲学的な地盤のうえにこの問題を置き据えて理性的な考察を徹底すべきであるという要請が不可避となる。

ライプニッツによる考察の基礎には次の3つの（神学的、真理論的、宗教哲学的）テーゼがある。まず、神の能力はその知恵に従属する。これは神学的観点に基づくものである。「神の能力はつねに神の知恵に従属する」ものであり、「神の振る舞いは知恵、善意、そして正義によって鼓舞される」（8）。

次に、「真理は一義的であり、論理的、形而上学的、そして道徳的な原理は普遍的である」（9）。神であっても善と悪、正と不正、あるいは諸々の理性的原理を自由に設定できるわけではない。それらの観念は「神において創造されざるものであり、したがって永遠のものである。それらは神の知性の部分をなす」（同）とライプニッツは考える。ここにはデカルトの永遠真理創造説に対する批判が見られる。諸々の真理が神の創造によるものだとするなら、神はまったく恣意的にそれらを創り出すのでなければならない。あるいは真理創造の際に神が何かを参考にしたのであれば、創造に先立つその原真理とは何か問われることになるが、これは無限後退の問題を呼びこむ。したがって「神は善の観念を創造したのではなく、自らのうちにその観念が永遠にわたって書きこまれているを見出すのである、と認めねばならない」（10）。

最後に、神と人間において正義と理性の諸原理は同一である（12）。このテーゼは「弁神論」という企てのそもそもの可能性に関わるものである。神の理性と人間の理性とは同一のものでなければならず、人間は前者を「信仰」というかたちで受け取ることができるのでなければならない。たしかに「一方は超常的な啓示に由来し、他方は自然の光に由来する。それらはしかし同じ形式をもつ。つまりそれらは等しく同一の資格において真理である」（11）。

そうでなければ、人間の理性によって神の大義を擁護するという試みはすべて無意味なものとして挫折せざるをえないだろう。これは「弁神論」の議論全体の大前提となるものであり、したがって著作『弁神論』はこの問題を扱うところの「信仰と理性の一致についての〔予備的〕叙説」という節によって幕を開けるのである。

こうして「ライプニッツにとって、悪の存在を説明し、神を弁明することは正当な要求であるし、それどころか理性からの要請」(14)だと考えられる、とラトー氏は結論づける。

続く「b. 悪についての法学的、神学的、人間学的アプローチ」において、ラトー氏はライプニッツがなぜ繰り返し「神」の「正義」について言及するのか、という点について、議論がもつ自然神学と自然法学の交差という性格から考察している。ライプニッツは「正義／権利の観点から悪の問題に取り組む」(15)。すなわち、「考察の真の出発点は「なぜ悪が存在するのか？」あるいは「悪はどこから来るのか？」と問うことではなく、むしろ「善であり、賢明であり、全能であると言われる神のもとでこのような無秩序がいかにして可能なのか？」と問うことなのである」(16)。

著作の正式タイトルである『神の善意、人間の自由、悪の起源についての弁神論』にも示されているように、ライプニッツの議論は神学的なものに終始するわけではなく、「その射程は人間学的なものでもある」(18)。悪の問題は神学の領域とともに人間学の領域に属するのであり、悪が存在することではなくむしろ善行が報われることなく、悪行が咎められることもないことによって惹起される問題意識こそが「弁神論」の問題系を形成する。ラトー氏によれば、神は正しい、人間は自由である、悪は存在するという3つのテーゼをライプニッツは統合し、そこから「神はこの世界を創造しながら、悪を

容認し、悪に協働しさえする。にもかかわらず神は正しい」(18-19) という結論が導かれる。

「c. 弁神論のもつ弁護的な側面と教説的な側面」では『弁神論』全体がふたつの目的を具えており、そのそれぞれに対応する言説のタイプも区別されるということが確認される。まずは「神が正しいこと（悪が存在するにもかかわらず）と、神が諸可能世界のうちの最善を創造したこと」(27) を弁護するという狙いがある。それは、神の正義と最善の可能世界を論証し、神が悪の存在を容認したことを神学的かつ人間学的に説くという「教説的な狙い」とは区別されるべきものである。いずれにしても『弁神論』はこれらの異なった次元に属する議論を具えていることがラトー氏によって確認される。

「d. 可能な最善世界の現実存在は論証されうるか？」では、神の世界創造における最善選択について論じられる。神は無限の可能世界を思考することはできたが、最善を選択しないことができず、最善を選択しなければならなかった。ここで問題になるのは「神の知性ではなく神の意志に関わる」ところの「論理的ではなく道徳的な必然性」(31) であるが、この区別については本書第 I 部で深く掘り下げられている。

「e. 神は最善以外のものを選択できるか？」もこの論点に関わる。論理的必然性という観点から見れば神は最善世界以外のほかのあらゆる可能世界も思考することは可能であり、だとすれば最善を選択することは論理的には導かれえず、いかなる世界を創造することも可能なはずである。だとすればこのことと「最善以外のあらゆる選択は神の完全な本性と両立不可能である以上、実際には絶対的に不可能であるというテーゼ」(36) は矛盾するのではないか。ラトー氏によればそれは見かけ上の矛盾である。神について考えるうえでわれわれは「可能性の問いを現実性の問いから区別しなければなら

ない、同様に、能力を意志から区別しなければならない」(37)。「できる」からといってそれを「意志する」とはかぎらない。前節でも触れられているように、最善の選択は論理的必然性ではなく道徳的必然性に関わる。

こうして、神による最善世界の創造の論証にはいくつかの段階が区別される。まず、「神の全能〔が及ぶ範囲〕は、可能的なるものの限界に制限される。したがって論理的にあるいは形而上学的に不可能なものは、神にとって不可能である」。たとえば神は「四角い円」や「存在すると同時に存在しないもの」といった矛盾を含むものを創造することはできない。しかしながら思考することが可能であるものについて神の知性に制限はない。すなわち「神の全能は、すべての可能的なもの、**「可能世界」**と呼ばれるところの、可能的なものからなる無限の結合とに及ぶ」。だとしても思考可能であることがそのまま世界の現実的な創造を帰結するわけではない。創造を決定するのは神の善なる意志である。

無限の知恵と完全な善意は、この全能と結びついて、諸可能のうち唯一の結合を選択することへ導く。これ〔=唯一の結合〕は、神が自ら罪を犯すことなしに道徳的に創造し得る唯一の世界である。その全能のおかげで、神は可能なものなら何でも作れはする。しかし、その知恵と善意は、神を最善を実現することへと導くのである。この道徳的必然性は、たとえそれが神に対していかに拘束的で強力であろうとも、偶然であることの本性（神が最善を選択するということ）を変えたり、それを必然的なものにしたりすることはできないだろう。／それゆえ、神は最善以外のものを選択できるということ（神の全能を考慮する場合）と、神は最善以外のものを選択できないということ（神の知恵と善意を考慮する

場合) とを、同時に——ただし、二つの異なる意味において——主張することは可能である。(38)

この「論理的必然性」と「道徳的必然性」の区別こそ、ラトー氏が論じる
ところによればライプニッツ的弁神論を矛盾なく理解するために鍵なのである。
神は無数の可能世界を創造することができるにもかかわらず、ただ唯一
の最善の世界しか生み出すことができない。「神は常に、そして過たずに最善
を為す。それは神が別様に為し得ないからではなく、そう為すべきだからで
あり、また自らの完全性に相応しくないことや自らの正義に反することを為
し得ないからである。諸可能世界のうち最も完全なもの以外のものを創造す
ることは、論理的にはなく道徳的に不可能なのである。それは矛盾を含む
のではなく不完全性を含むのである」(42-43)。

「序章」の最終節である「f. 学知と信仰」では、『弁神論』が必然的な論証
に基づいた完全な学ではなく「教説」(doctrine) であることが触れられる。
「神はつねに最善を選択する」という命題と「われわれの世界は可能な最善世
界である」という命題は、「理性によって証明されアプリアリに基礎づけられ
てはいるが、しかし偶然的であるがゆえに論証不可能である」(44)。だから
といってこの議論の意義や役割が失われるわけではない。そもそも悪の实在
に対し神の無罪を明かすという「弁神論」の目的は、完全な理性的証明を完
遂するというのではなく、ラテン語の *doceo* 「教える」に遡りながら言え
ば「他人を教育すること」であり、他人に働きかけることで「〔神の〕理性
(Raison) に対する〔人間の〕理性 (raison) の愛を呼び起こすこと」(45)、す
なわち「神は死んだ」のであり、したがって宇宙もまた無秩序な混沌で、す
べては偶然の産物なのだという断定(それ自体また理性的な推論によって導

くことのできない結論である)を退け、それによって人々を説得することなのである。このように『弁神論』の議論は純粹な哲学的論証ではなく、全体として他人を教化するという実践的な目的に向けられている。

以上が「序章」の議論の要約であるが、続く本論ではそれぞれの論点について詳細に検討が行われる。すでに明らかなように、ラトー氏は『弁神論』という精神的な大伽藍の多層的構造の要素をひとつひとつ丁寧に分析し解説していく。その議論のそれぞれがまた啓発的なものであり、悪の实在と神の正義をめぐる問題の深みを感じさせてくれるものである。

3. 悪の实在と世界の最善性——第I部第2章について

ここではさらに、「第I部 諸可能世界の最善とは何か?」を取りあげてみたい。第I部は2章立てであり、それぞれの章がライプニッツの「世界」概念、すなわち「可能世界」(共可能性)と「最善世界」という『弁神論』の中心となる概念についての議論を展開している。その際にラトー氏が考察の軸とするのは、先に確認した「論理的必然性」と「道徳的必然性」の区別と、それに基づく「可能的なもの」と「現実的なもの」の区別である。とくにその第2章「ライプニッツにおける完全性、調和、そして神による選択」ではこの書の仏語タイトルでもある「諸可能世界の最善のもの」(le meilleur des mondes possibles)が扱われるので、そちらを主に見ていくことにしたい。

先に確認したように、創造された世界は神の(知性ではなく)善なる意志に基づくものであるから、それは最善でしかありえない。この規定によってライプニッツはこの世が神の道徳的な正義に反する非道徳的で混沌とした世界であるという把握を予防的に退ける。

ラトー氏によれば、最善の可能世界が現実存在していることについてのライプニッツの推論は次のように再構成される。

1. その偶然性が究極的起源としてひとつの必然的存在者を要請するような世界が存在している。
2. 神と呼ばれるこの必然的存在者は、(すべての可能世界を包含する)無限の知性と、(すべての可能世界から一つを選択する)全面的に善たる意志と、(選択した可能世界を実現する)制限のない力を有しているような存在者である。
3. このすぐれて完全な必然的存在者からは(ライプニッツなら絶対的ではなく「道徳的」と形容するであろう必然性に従って)最善しか帰結しえない。
4. われわれの世界は、それが現実存在している世界なのであり、選択された世界なのだから、最善の可能世界である。(102)

神は無限の可能世界を思考することはできるが、何も創造しないか、あるいは最善を創造するかしかなない。そしてその選択は偶然にまかされるとされる(したがってライプニッツの神は数学者のような仕方で物事を測定し規定するような神ではない)。しかしながら実際に世界は存在しているのだから、この現実存在する世界は、仮にわれわれの目から見れば悪や災いに満ち溢れているとしても、諸可能世界の中から選び取られた最善のものでしかありえないのである。

しかしながらいわゆる「善さ」を尺度としてその度合いの比較測定を行うとすれば、それよりも「より善い」ものということは無限に考えることができるのではないだろうか。言い換えれば、最大値への到達ということが「善さ」について考えるのだろうか。その疑問に対してラトー氏は「円」や

「精神」（「最もかさばらない、すなわち最も妨げにならない」がゆえに創造されたものの中で最も完全なもの）を例に、有限の領域ですら絶対的でそれ以上凌駕しえないものがあるとライブニッツが考えていることを示唆する。しかしながら問題は考えることが可能な「世界」の比較である。そもそもいかなる「世界」であっても無限であり、有限なものを「世界」とは呼べないはずである。だからこそ「その完全性が有限な事物の完全性——それはつねに他のより完全なものによって凌駕されてしまう——を測るのと同じ仕方で測れないのである。無限は他の無限としか比較できない」（113）。

ここで問題となるのは、そうした無限なものとしての「世界」の善さないし最善とは何か、ということである。ここで「最善」とは「使用可能な諸条件を考えて、与えられた目的に最も上手く見合うもの」であり、それは「手段が最も上手く用いられ目的が最も上手く実現されるような手段と目的の組み合わせから結果する」（115）とされる。

宇宙はひとまとまりのものであり、「大海のようなもの」（126）である。ここではすべての実体が結びついており「いかなるものも残りの全体に影響をあたえずには変化されえない」（同）。善が善であると判断されるのはこのネットワークの中でそれがどれほどうまく機能するかということに依存する。だとすればあるひとつの要素をその網目から抜き出して善であるないし悪であると判断することはできない。それに加えて善悪の判断を下すわれわれ人間もまたそのものとして世界の「海」を構成する一部であるがゆえに、ある要素の倫理性について大局的な視点をもって俯瞰し判定することができない。だとすればある視点から悪と判断されるものはまた別の視点からすれば善と見なされる可能性を常にはらんでいる。「指揮する將軍の誤りが思わぬ仕方で勝利につながることもあるし、あるいは、アダムの墮落によってわれわれは

キリストのとりなしに関わることができる」(127)とすれば、悪がより大きな善を伴うこともあると言うこともできる。

こうした善悪のリズムを考慮するなら、相対的な悪が存在する世界をそのまま悪であると断定することも、逆にまたその悪を欠いた世界がより善なる世界なのだと言主張することもできなくなる。『弁神論』124節でライプニッツは次のように述べている。

ミダス [王] は、持っているものといったら黄金だけであって、そのため自分を裕福とは思えなかった。それに加え、知恵もさまざまであらねばならない。どんなに貴いものであっても同じものを変わりばえもせずただ繰り返すだけならば、それは過剰であり、貧困でもあろう⁽³⁾。

どれほど上等なものであってもそれをそろえるだけなら単調になってしまう。ライプニッツはこの単調さを悪であると考えている。「書齋に上等に製本したウエルギリウス [だけ] を千冊も置いておくこと、オペラ『カドミュスとエルミオーネ』のアリアだけを歌って明け暮れること、磁器を全部壊して金製のカップだけを用いること、ダイヤモンド製のボタンだけをつけること、ヤマウズラしか食べないこと、ハンガリーのワインかシラズのワインしか飲まないこと、こうしたことが理性的と言えようか」⁽⁴⁾。単調さは理性的とは呼べない。さらに言えば、理性的なものばかり集めてもそれは逆説的に世界の理性性を損なうのである。

(3) 『ライプニッツ著作集第I期 宗教哲学 [弁神論 上]』佐々木能章訳、工作舎、2022年、227頁。

(4) 同上。

このことから「理性的被造物しか存在しなかったら、善はもっと少なくなってしまう」⁽⁵⁾という見解が導かれる。すなわち悪の介在によってのみ得ることのできるより優れた善があると言えるのである。だとすれば、「世界から悪を取り除けば、じっさいには悪よりも多くの善を消し去ることになる……逆説的にも、最善は不完全なもの、最小の善、悪を含むゆえに、善以上なのである。善から最善へと移行するとき、われわれは部分から全体へ、そして量から質へと移行する」(129)。このようにライブニッツの「最善」とは、善なるものの最大量ではなく、「最大数の諸事物との両立可能性と調和」としての「完全性」のことを意味している。この調和はまた「多様における一致あるいは同一性」(130)、あるいは端的に「多における一」(133)であるとライブニッツは呼ぶ。

調和は宇宙の中に善しか存在しないことを拒否する。善が過剰になれば悪になるし、美に対立する同質性と一様性を産み出してしまうだろう。善しか存在しないなら、善はより少なくなってしまうし、最大の善しかないなら、卓越さはその価値を失ってしまう。(131)

『弁神論』ではこう述べられている。「結局神はすべての可能的事物の中から最善の全体的結果をもたらすものを選択しなければならなかったのであり、悪徳はこうしてもたらされたのであるからには、その悪徳を排除したなら、神は完全に善なる存在、完全に知恵ある存在ではなかったことになってしまう」⁽⁶⁾。

(5) 同上。

(6) 『弁神論』、上掲書、228頁。

以上が本書第Ⅰ部第2章におけるラトー氏の分析のあらましである。われわれはラトー氏の鮮やかで丹念な読解をたどることで、最善世界の創造のために神が悪を排除しなかった積極的な理由としてライブニッツが想定した結論にまでたどり着くことができる。このように本書は『弁神論』を読むためのきわめて有益なガイドであると言えよう。

おわりに 世界のあり様に向き合うことで悪と折り合う

神が創造したにもかかわらず、なぜこの世界には悪が溢れているのか——たしかにラトー氏の議論は「弁神論」の根本動機であったはずの、許容し難い悪の存在に対する嘆きにも似たこの切実な問いかけに直接的なかたちで応答することはない。本書はあくまでライブニッツ哲学のアカデミックな専門研究という控え目な立ち位置を超え出ることのない慎ましさを湛えており、今日に生きるわれわれがあえてライブニッツに倣い、悪の存在と神の正義を擁護する勇気を改めて与えてくれるわけではない……一見するとそのように思われる。しかし少し見方を変えれば、ラトー氏によるライブニッツ的「弁神論」の再構成にはそれに類するような、ある別の機能が認められるようにも見える。本書は、悪の実在に対して神の正義を擁護するという議論には神学のみならず宇宙論的な基礎的考察をはじめ多様な側面の広がりがある、ということを教えてくれるものであった。すなわちこの問題に取り組むうえで、なによりまずこの世界のあり様に向き合うことをラトー氏はライブニッツとともに求めていると考えることもできよう。最善であるかどうかが問われるのはほかならぬこの世界についてであり、世界の最善性とはなにより諸契機の全体が最適化された姿のことである。それをわれわれは即座に知り、すぐ

ポール・ラトー『ライブニッツの最善世界説』酒井潔・長綱啓典監訳、知泉書館、2025年 75

さま理解することはできない（あるいは正確に言えば世界に内在する有限的存在者である人間の理性によって捉えることは永遠にできない）。だとすれば世界とその善性の把握に対する性急な判断は必然的に避けられる。すなわち信仰と理性を重ね合わせることで、信仰の直接性は理性特有の媒介過程に巻きこまれるように、この世界が最善であることを確信するためにもわれわれはこの世界の多様性へと思考を開かなければならないのである。それはたしかに決定的な解答を先送りするものではあるが、何らかの救済を求める極端化を避け、息の長い、いつ終わるとも知れない迂回的な思索が必要なのだということ、少なくともひとまず納得させてはくれる。それによって、この世界は概して悪であり苦なのかもしれないという悲観主義的な即断をわずかにも抑えることができるとすれば、それもまた一種の可能な慰めであるのではないだろうか。